

早稲出ヨットクラブ

会報

第11号

昭和57年3月 発行
 発行所 事務局 舟岡 正
 編集 広報 石田 哲也
 編集 広報 松島 弘行
 会費振込先 第一勧業銀行 日本橋支店
 普通預金 一四四七三二九
 口座番号 一七セタヨットクラブ 杉山博保

シーズンを迎える

理事長 杉山博保

シーズンを迎えるにあたり、かえりみずと、早いもので私が理事長の任を請け、更に新理事会が発足してから一年が過ぎてしまいました。

毎月の定例理事会に出席して、熱心に討議、協力してくれた各理事諸君のお陰でクラブの活動も、現役員への援助も除々にはありますが向上してきたのではないかと考えて居ります。まだ、やり残した事、やらねばならぬ事が山積しておりますが、今年もOBの皆様方の協力を得ながら一つ一つじっくりと取り組んで行かねばと思っております。

今年のOB総会は稲龍の乗艇会を兼ねて、横浜の岡本造船所二階のヨットクラブにて一月十六日(土)開きました。懐かしさも手伝って大変盛況で、仙台からわざわざ平野理事もかけつけて下さいました。

昨年の決算、事業報告後、理事会側の本年度の決算、事業活動案を計りました。出席OBの快い賛同を戴きましたので、我々理事一同は今年一年間この案を基になお一層の努力、実現に力を尽くして行く所存であります。

毎月例会を開いており、どなたでも出席、発言自由という形式でやっておりますので、皆様方もこれはというご提案、お考えをお持ちの方は是非理事会に出席を戴きお智恵を拝借出来ればと考えて居ります。

さて総会の席上、小沢会長のご挨拶の中で特に早慶戦に関連しての考えと思われませんが、「我々は一旦ヨット部員として現役の学生を迎え入れた以上、ヨット部員として立派に卒業させることがOBの役目である」との主旨の発言がありましたが、昨年の理事会の決議でこの問題は再度確認済みであり、本年もこの決議事項は変わらないものとして実行する方針であります。

規約に従いますと、役員任期は二年という事になっておりますので、昨年と同じメンバーで理事会を運営して行くことになりませんが、我々クラブの活動も予算があつて始めて出来ることとあります。乏しい財源の中で少しでも有効な対策をと、各理事も智恵を絞って努力しておりますのでOB諸氏の絶大なご協力をお願いする次第でございます。

昭和57年度OB総会

昭和五七年度OB総会は去る一月十六日(土)横浜・岡本造船所にて開催されました。五七年度事業報告・決算報告に対する承認につづき、五七年度の事業計画・予算案、更に木村理事他の推薦で38年度卒の山崎富伴君(後述)の入会希望に対し全員の拍手にて承認されました。

五六年事業報告と五七年事業計画

一月二三日の総会より新体制の執行部のもとで、毎月第三木曜日に理事会を開きヨット部の発展に、如何に理事会が寄与すべきかについて議論を重ねてきました。

五七年度の重点目標は収入の増大、新名簿の作成、ヨット部への強力な支援等でありましたが、会員OB諸氏にけ一四名の方より年会費が送金され、全日本学生選手権には五八名の方より寄附が寄せられ、また名簿発行のための広告料は十五名の方より協力をいただき、全収入は二、七七五、二〇七円となり大過なくシーズンを終了することができました。

- ① 会報の発行(第九号・十号)
- ② 新名簿の発行
- ③ 全日本学生選手権遠征寄附
- ④ 四七〇級世界選手権壮行会(八月)
- ⑤ 四大学OBヨットレース(二位)
- ⑥ 早風会(十一月)
- ⑦ 稲龍の整備(十二月)
- ⑧ レスキューボート購入の検討
- ⑨ 早慶戦に関する論議

ヨットクラブ親睦のために種々な企画を考え、ヨット部支援のため収入を増やすことを重点にしたいと思っておりますが、いずれも会員諸氏の強力な支援なくしては実行不可能です。



- ① 会報の発行(第11・12・13号)
- ② レスキューボート購入に対する寄附

- ③全日本学生選手権遠征補助
- ④四大学OBヨットレース
- ⑤稲龍乗艇会
- ⑥稲龍整備
- ⑦早風会(遭難より二十年目)
- ⑧役員任期満了に伴う新役員の改選
- ⑨早慶戦復活の努力。

昭和56年度収支決算書

(昭和五十六年一月一日～五十六年十二月三十一日)

(収入の部)		(支出の部)	
摘 要	金 額	摘 要	金 額
前期繰越金	21,446	ヨット部へ援助金	1,121,060
年会費	1,170,000	稲龍へ援助金	363,931
寄付金	636,540	総会・臨時総会費	273,870
広告料(名簿)	650,000	諸 会 費	70,000
総会・臨時総会費	256,470	謝 礼・慶 弔 費	95,000
利 息	5,751	名簿印刷発送代	249,650
		会報印刷通信費	404,310
		次期繰越金	162,386
合 計	2,740,207	合 計	2,740,207

右記の通り決算致しました。
 昭和56年12月31日 会計 浜田 裕
 中島 健治
 右記の通り相違ないことを認めます。
 昭和57年1月14日 会計監査 河村雄三郎
 米田 秀久

昭和57年度予算案

(昭和五十七年一月一日～五十七年十二月三十一日)

(収入の部)		(支出の部)	
摘 要	金 額	摘 要	金 額
前期繰越金	132,386	ヨット部へ援助金	1,300,000
年会費	1,500,000	稲龍へ援助金	500,000
寄付金	1,000,000	総会・臨時総会費	300,000
総合・臨時総会費	306,000	諸 会 費	100,000
利 息	7,614	謝 礼・慶 弔 費	100,000
		会報印刷通信費	360,000
		子 備 費	340,000
合 計	3,000,000	合 計	3,000,000

57年就職状況

小池充郎(法)・三井銀行、長瀬勇人(商)・住友信託銀行、石渡 浩(法)・日立製作所、松田真理子(文)・三菱商事、江上真弥(文)・三井信託銀行、喜多内悦郎(商)・電通、芝崎俊行(商)・丸紅、戸枝隆也(政経)・三井不動産。

57年度ヨット部新役員
 主将 黒田浩司(政経)
 主将 渡辺輝雄(専門)
 主務 鎌田 等(政経)
 学連 森田朋愛(政経)

《稲龍》の現状とこれからの課題

稲龍委員会 杉井謙治

稲龍も昭和三十九年秋建造以来、はや十八年目を迎えました。その間、日本一周、インカレ支援のため仙台、西宮行等々、早大ヨット部のシンボルとしての活動を行ってまいりましたが、現在さまざまな問題を抱え、稲龍本来の持味を十二分に活用するにいたっていないのが現状です。

さて、問題は大きく分けますと、三つあり、以下簡単に述べますと、

一、艇体の整備・機装品交換について

(1)十八年目の木造船であり、大学からの整備費により毎年一度上架し基本的整備を行っていますが、老朽化の為修理箇所が増加し年々整備費用が増大しており、その資金確保が難しく大学に毎年申請していますが思うにまかせん。

それ故、OB会に支援をお願いしなければならぬのが現在の状態です。

(2)将来の整備箇所として

- (イ)マスト、プームの取替 (ロ)ラダーボードの交換 (ハ)合板デッキの張替
 - (ニ)二重張ハルの点検
- の四点が大きな項目かと思われま。

(3)新規に購入すべき機装品として

- (イ)スピニングカ (ロ)レギュラージブ
 - (ハ)プロック (ニ)シート類 (ホ)スピンシート用ウィンチ
- (4)船体保険について
 保険料が高額の為、現在は50万円の

保険にしか加入していません。

(5)本年度整備として11月末シーボマアにて約〇〇万円の予算で上架整備の予定であり、予算内訳として大学より七〇万円、OB会より三〇万円の資金援助。

二、乗員について

(1)従来からヨット部は稲龍専属の部員募集をおこなっていない為、現役部員の減少に加えて、小型ヨットシーズンの長期化により、現役稲龍係を中心とした現役主体の稲龍運営にも限度があります。

稲龍を十分に活動させる為には多数のOBの支援が必要になって来ているように思われます。

(2)これまで稲龍OBを中心とした稲龍委員会を設置し、現役稲龍係を指導バックアップして来ましたが、かならずしも満足のいくものではない。

これからは稲龍OB以外の方にも委員会に参加していただき、稲龍を十分に活用するため、OB諸兄の種々なご意見をいただきたいと思っております。

三、活動資金について

(1)大学から(イ)係留費、管理費は直接県油壺ボートサービスに支払われています。(ハ)整備費として年40万円位、年一度の上架ハルトム塗装工事に大半が食われ、新規改装整備をする

には資金不足でありOB会に資金援助をお願いする所以であります。

(2) OB会より、本年度から年30万円の援助をしていただけるようになり今秋の整備費の一部に当てさせていた

(3) 部より、必要に心じて援助となっておりますが、小型艇の経費がかさむため多額は期待できません。

(4) 稲龍OBには過去整備費不足、セーリング新調、備品購入等その折々に援助していただいております、この紙面をお借りしてお礼を申し上げます。これからも宜しくお願いいたします。

(5) 稲龍によるアルバイトは、現役の時間的制約の為あまり出来そうになく期待薄です。

(6) まとめとして、稲龍の活動を充実したものとするには、年間活動費として大学からの整備費を含めて、およそ一〇〇万円から一二〇万円が必要であり、三〇万円から五〇万円が不足であります。

大学に対し整備費増加をお願いしていきたくは思っていますが、なご不足分につきましては今まで以上にOB会にご理解・ご支援していただかなければならぬかと思われまして、何卒宜しくお願い申し上げます。

以上簡単に稲龍の現状とこれからの課題を述べてまいりましたが、早稲田ヨットクラブ、早大ヨット部のシンボルとしての稲龍をOB諸兄の厚いご支援の、稲龍委員会、現役一丸となりまして充分な活躍の場を与えてまいりたいと考えるものです。

下記のが来年度57年度稲龍活動予定

であり、多くのOB諸兄の乗艇を心からお待ち申し上げます。

稲龍57年度活動予定

- (1) 一月十六日 初乗り 横浜岡本にて
- (2) 6月 強化クルージング(3、5日)
- (3) 7月 鳥羽レース(往復一週間)
- (4) 鳥羽にて中部OB会乗艇会
- (5) 往路・復路メンバー交替によるOB多数の乗艇を希望しています。
- (6) 8月初旬 (伊豆七島クルージング(7、10日))
- (7) 稲龍OB強化合宿
- (8) 8月末 実技合宿
- (9) 12月 冬期強化クルージング(3、5日)
- (10) その他 各種NORCレース参加

OB 名あたりの乗艇費(会費及雑費)一日につき、三千元〜四千元。

56年度会費納入者(第10号会報以降)

- ⑬ 藤村、⑭ 田窪、⑮ 林、⑯ 渡辺、⑰ 米田(秀)、⑱ 山品、⑲ 小島、⑳ 八藤丸、㉑ 田、㉒ 赤松、青木、㉓ 川瀬、㉔ 松下、㉕ 橋、風間。

ご寄附をいただいた方々(第10号以降)

- ⑰ 田窪、⑱ 菅田、⑳ 渡辺、山崎、武村、塚崎、㉑ 藤井、恒川、㉒ 松下。

OB名簿広告ご協力(第10号以降)

- ⑳ 石田、㉑ 中島。(敬称略)

新OB山崎富祥君を紹介 ㉒ 木村光成

山崎君はヨット部に三期まで在籍したハリキリボーイで、スナイパーとして活躍しておりましたが、家庭の事情で退部。

38年卒業後、九州コンクリート職に就職しその後、吉田さん、冬至さん他、九州在住のOBとヨット仲間として親しいつき合いをしていました。

此度、前記の方々の方々の推薦により、OB総会で入会を認められたものです。

お知らせ

此度、ワセダヨットクラブ会員用として、ブレザー用のアンブレム(紋章)一、〇〇〇円)とタイプン型OBバッジ(一、〇〇〇円・いづれも送料共)を造りました。ご希望の方は会費と同時に振込用紙裏面の連絡欄に記入の上お申し込み下さいます。折返しお送りします。

早風会副会長

青柳 辰男様

昨年十一月末、早風会副会長の青柳辰男様が亡くなられました。

青柳様は昭和三七年(早風号)で遭難された青柳充浩君のお父様で、東京商船大学卒業後、商船船長、関門パイロット協会会長等の要職を歴任され、その後ご自宅でご静養されておられました。

十九年前、現在の「稲龍」建造に際しては、多大なご寄附をいただき、青柳様のお父様のお力添えがなければ建造不可能でありました。

OB、学生一同、心からご冥福をお祈り致します。

尚、ヨットクラブでは北九州のOB諸氏が、ご葬儀に参列させていただきました。

昔恋しい銀座の柳

— その頃のヨット部 —

16年卒 中塚勝三

私もそろそろ昔の事を恋しく思う年頃になった様で、このあたりでその頃の事を記録して置こうという気になり、思い出すままに悪筆をとる事にします。

何にしろ四十年以上前の事なので間違いだとか、差しさわりのある事も多いと思っておりますので、この点くれぐれもご容赦願います。

私が入部したのは昭和十二年で末だヨット倶楽部と云う同志の集りだった。それでも此の年だけの新入部員が三十名に達し、全員で八、九十名の部員数

だった。当時レースは横浜の本牧沖で行なわれ、品川(本牧館)以外に練習は無理だった。

従って新入生の練習は品川沖で行なわれ、品川のかき屋と云う貸ボート屋に四、五隻のデンギヤが繋がれていて、練習をする時は部室(南門前の永田運動具店)に連絡して出艇要に記名する事となっていた。

大体二年生以上が一名づつついて、新入生が三名くらい同乗する事となっていた。晴天の日はずく満員になって週一、二回練習出来れば良い方だった。

部室にいと上級生が来ていろいろと話を聞かせてくれ、一緒に昼食をしたり、午後の授業に出ない者はバスで銀座に出かけたりした。

夏休になると新入生の宿舎があると云うので喜んで参加した。宿舎は葉山の南方の和田海岸で、人里離れた美しい自然の海岸で行はれた。朝から日没迄ヨットに乗って夜は麻雀、ポーカー、ハワイヤングルー等々当時のヤングのエンジョイ出来るすべてを味わう事が出来て楽しかった。

当時のクラブにはスター級(紺碧)、カイト(小沢吉さんより貸用の小型クルーザー)、ロンスター(小沢信さんより松下の老クルーザー)、それにデンギーが六隻程度で、会宿参加人員は六、七十名だった。新入生の練習は大休風の無い午前中でヨットの舵をマスターするには不十分で欲求不満を感じていた。

反面陸上で練習に関する体験は充分であった。此の欲求不満は新入生の全員が感じた事で、又一年目も続いていた。要するに艇不足である。艇を造る資金は何処からも出て来ないので、シーズンオフには資金稼ぎの事業が常であった。

当時の学生ヨットは関東で東大、早慶、日大、商船学校、関東学院等で、関西で京大、同志社、阪大、それに関西学院が新加入、九州で九大等であった。レースはすべてデンギーで部員が手をかけて塗装し磨き上げた、云わば雑巾がけのヨットだった。この占高度の設計技術を要求される現在のヨットとは雲泥の差で、頭脳スポーツの特色の増大が現実化されている点は、当時我々の理想であっただけに、現役諸君は羨しき限りである。

その頃の早稲田は黄金時代と云われ、レースにも良い成績をのこしていたが、何よりも部員が大勢集った事である。これは多くの部員がクラブに魅力を感じていたからで、当時の諸先輩の人間性、クラブライフの演出力等が優秀であったと信じている。

昭和十三年、私は第二学院(第一学院は三年制、第二学院は二年制、部内では第二学院が、一番勢が強かった)の二年生だったが、此の年にヨットクラブの体育会入会運動が本格化し、先づ第一学院、続いて学部専門部は学部(付随)の入会が決った。

そこで、第二学院のみが取りのこされた。余り熱心な部員が居なかったの、私が努力するしかなかった。弁舌の立派な私は大それたが、兎に角、予算会議に出席して予算は足りないから入れてくれと頼んで、やっとこさ入会の許可を得た。この年にレース場が本牧から、山下町沖に移った。

これは昭和十五年(一九四〇年)に東京オリエンティックが決定し、此処にヨットハーバーを建設することが決まっていたのである。此の年に取りあえず決設備として横浜市が貯木場を繋船場とし、現在の岡本造船の隣にレース用ポールを立て、本部倉庫、用具庫、会宿所等々を建て、参加校も法政、明治、高等水産等増加した。

主なレースは早慶戦、関東、全日本インターカレッジ、それに個人選手権等で、昭和十六年には明治神宮大会(現在の団体の先祖)が始った。当時新聞の運動欄にはレースの記録のみならず、小沢吉太郎さん等の書いた予想も出たものがある。その昔と云うか、新聞社には無料アルバイトのサービスもした。

会宿所は本牧館からハーバーの会宿所か、弁天通りのかど屋に移った。ハーバーで会宿した時は食事が出前で、飲食には南京街の華勝楼の焼メシの出前を頼んだ。華勝楼は今も健在である。

此の秋にスター(紺碧)の建造費を稼ぐのだと云って当時の新響(今のN響)、指揮はローゼン・ストークをやつて、日比谷公会堂で特別演奏会を主催された。この企画を田原主将から発表された。私等下級生は切符を売るだけだったが、切符は売手市場で何なく売れた。

それにしても当時の千五百円(現在の二万円程度)でもするヨットを勝手に造って代金は後で稼いで出ろなんて、今の実業家でもそう簡単に採らない事業を学生の分際で何と偉い事をするものだと感心した。

感心した話を今一つすると、本牧館で会宿中にもう不思議に思われる事があった。それは学部の遊び好きと思われる人々が「何処に遊びに行くのだから」と下級生がつぶやいていた。それが一緒に出て行かないで一人づつ別に出て行くからである。兎に角、門限には帰っているのに特に疑いを持たなかったが、此の謎は後年解けた。それはチャヤヤだった。

チャヤヤについての説明を少しすると(本来非公認事項と思われるので部外秘)当時本牧に二十数軒あった様で、今の何々ホテルの様で不愉快な建物ではなく、外人向きのスマートなものだった。我々がよく出入りしたのは、第一、第三キヨ(割合、ハイクラス)で、海岸の二階建て棧橋が海に出ていてその先端にボーチがあり「窓を開ければ港が見える」と云う歌の文句そのもののエキゾチックな雰囲気だった。

門を這入ると積込みがあつて玄關、一階はダンスホール、その一角にバーがあった。お客は外人、日本人、割合でホールにはロングドレスのお姉さんが居て、皆二階に自分の部屋を持っていた。初めて行った時は流石にドキッとした。それに世話役のお姉さんが又英語の出来やらいセシの人で、若き学生共はどうやらこのお姉さんに好かれた様で、飲んで帰って、大へん安かった。ホールで早稲田おけさ」をよく踊った。

ついでに会宿の夜をも一つ、会宿がかど屋に移ってからよく行ったのが、マスコットと云う山下町のフランス風のバー。此処はムッシュがフランス領事館に勤める趣味を始めた店で、マダムはバリの生活を身につけた気のいいオバサン(顔は少しコワイ)で、鎌倉在住の文壇人(大

仏次郎氏等)の良く来る処で、此処にも若き生徒は好意を持たれた商売とは無関係で遊ばせてくれた。

ここで覚えてたシャノンと会宿のハワイヤンは私の青春のメロディーで今も身につけている。富川さんの自作のモデルシップにシャノンの響が同調して、パリの屋根の下」の雰囲気だった。

山下町のハーバーで会宿中の思い出に小沢さんが兵役を終えられて、サツと来られた時の事を覚えている。それは話にはよく聞いていたがお目にかかるとは初めてで、長身にグレイの背広、ソフトハットと云う出で立ちが当時の代表的二枚目原謙より上等だと思へた。兎に角、大先輩と云う事で私などは最敬礼の方で話をする処迄は行かなかった。恐れ多いと云う事では昭和十三年、四年とキヤプテンをされ、黄金時代の主役だった田原さん(道布ボス)からある日の事(ボート(富士見荘)に空部屋が出来たから来ないかと誘われた)。

丁度下宿を替りたいと思つていた時だったので、半ば恐怖心を感じ乍らも暫居する事とした。此の高見荘は後日、平野和夫氏が移って来た。次に前からの住人だった金子四郎氏がコット部に這入りたいと云い出した。

其後佐藤秀郎氏が又移って来て、ホス以下五名のヨット部が同じ屋根の下に住んでいた。会宿と一緒に寝起きし乍らどうして下宿まで一緒に居たがるのかよく解らないが変な連中である。然し今から考えてみるとこの変な連中の気風がヨット部を大きくしたのではないだろうか。

昭和十五年、満州事変は支那大陸へと拡大し、ヨーロッパではナチ独逸が戦線を広げ、地球は將に戦乱のつばと化し、此れが為る東京オリエンティックは中止、その変りとして云々記念二十年を記念して東亜大会が開かれた。ヨットではフィリップピンからウィルヒ

一と云う夫妻が参加した。此の時に出来上ったハーバーは、其後昭和二十年代、三十年代と、昭和三十九年に行なわれた東京オリエンティックの江の島迄レース場だった。

此の時にヨット協会が試作されたモノタイプの内から、二隻の私下けを受けて関西に持ち帰った。私はこのヨットの船頭役で、三年間に渡って夏休みのすべてをこのヨットと共に過ごした。お蔭でヨットに対する欲求不満は完全に解消した。

学生最後の夏休み(昭和十六年)にはこの二隻のヨットで瀬戸内海を高島目指してクルージングしたが、途中赤穂御時で台風情報に接し引き帰した。

東亜大会と云えば、大東亜共栄圏の物資輸送の重要性から、国策会社の東亜海運が出来て、河田照(大蔵大臣)が初代の社長となった。松山さん(日清汽船)で合併により初代の社員となった。

次に田原、富川、故向角の三先輩が、一緒に此の会社に入った。翌年には高木茂さん、次が故堀内氏と小生、翌年が故吉田大氏と次々と入社した。此の会社は戦後、マッカーサーによってつぶされたが、存続していたらヨット部もたいな、変な会社になっていたのでは……と思ふ。

昭和十五年には堀さん、十七年には隈部氏が主将を勤めた。両氏共理工科の学生だった。その頃の理工科は実験等学業の暇にスポーツをする事は難しいとされていた。然し私は大いに疑問を持っている。私は近代学生ヨットはその性格から理工科の学生諸君が中心となって、やって欲しいと思つている。

大部余計な事を書いたようですが、以上お粗末乍ら、私を中心とした、その頃のヨット部の一節であります。

老眼の方々には、お気の毒ですが、貴重なお話しなので全文掲載しました。

(編集)